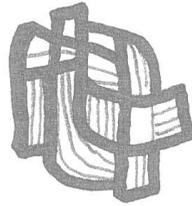


教育実践

京都経済短期大学藤原ゼミナール

「ネパール教育支援活動」



藤原 隆信

京都経済短期大学・経営情報学科

はじめに

京都経済短期大学の藤原ゼミナールでは、「非営利組織のマネジメント」をテーマにしてNPOやNGOのマネジメントのあり方について研究を進めています。ゼミナールでは非営利組織に関する文献研究を進めると同時に、「実践を通じて学ぶ」という視点から二〇〇一年度より計五回、世界最貧国の一つといわれているネパールを訪問して現地の子供達に文房具を手渡す活動（「ネパール教育支援活動」）を続けています。

二〇〇五年年度の「ネパール教育支援活動」は、八月十七日から二十八日までの十一泊十二日の日程で実施しました。ネパールではカトマンズとポカラという町を訪問し、三つの学校（ジョティイ・プライマリスクール、バワニカリカ・セカンドリースクール、シュリークンダハ・プライマリスクール）の子供達に直接文房具を手渡してきました。また本年度は、文房具を手渡す活動に加え、ネパールで近年問題になっているストリート・チルドレン（帰る家のない子供達）のための施設建設も行いました。

ここでは、二〇〇五年年度の「ネパール教育支援活動」の

取り組み内容を紹介すると共に、活動を通じて学生達の意識がどの様に変化したかについて紹介させて頂きます。

二〇〇五年度「ネパール教育支援活動」

事前準備

京都経済短期大学の藤原ゼミナールでは毎年、夏期休暇を利用してネパールの子供達に文房具を届ける活動（「ネパール教育支援活動」）を続けています。ネパールに持参する文房具は短大の学生や教職員、地域住民の方々に呼びかけて集めています（二〇〇二年度以降は京都京洛ライオンズクラブから文房具の寄付を受けています）。ネパールを訪問するメンバーは毎年約二十kgの文房具を背負って現地に向かっています。本活動の特徴は、ゼミ生がネパールの子供達に直接、一人一人手渡しで文房具を手渡す点です。日本から文房具を郵送することも

ふじわら・たかのぶ ●一九七一年、大阪府生まれ ●主な著書・論文に『企業経営変革の新世紀』（共著、同文館出版、二〇〇二年）、『IT社会と経営情報』（共著、六甲出版、二〇〇二年）、『変容期の企業と社会』（共著、八千代出版、二〇〇三年）、『現代企業における個人の自律性』（共著、文真堂、二〇〇四年）、『経営労務の新しい課題』（共著、晃洋書房、二〇〇五年）、『関係性と経営』（共著、晃洋書房、二〇〇五年）、『市民にとっての管理論』（共著、八千代出版、二〇〇五年）。

可能ですが、それでは子供達の手に渡らない場合がほとんどです。たとえ現地を持参したとしても、直接子供達に手渡さなければ彼・彼女らの元には届かないのが実態です（現地の方から直接そう聞きましたし、そのような経験を実際にしました）。

今年度のゼミナールでは、前期中にネパールという国の姿や人々の生活、現地の教育制度の現状と課題などをゼミ生が分担して調べ、授業の中で報告し合いました。前期授業終了後は、ネパールを訪問するメンバーで何度も集会を開き、寄付して頂いた文房具の集計や仕分け作業を行いました。このような事前準備を経て、八月十七日から十二日間に及ぶ「ネパール教育支援活動」が始まりました。以下では、学校訪問の様子と施設建設の様子と共に、活動を通じて学生の意識がどの様に変化したかを紹介させて頂きます。

ジョYTEIー・

プライマリースクール訪問

（二〇〇五年八月十九日）

カトマンズのホテルからバスで約四十五分。大きな道路から徐々に狭い道へ、最後は全く舗装されていないデコボコ道を走り、ようやく停車。ここから先は車が通れるような道はなく、持参した文房具を背負って草木の生い茂る山道をみんなで声を掛け合いながら歩いて行きました。

た。写真のような山道を約十五分歩き、ようやくジョティ
ー・プライマリースクールに到着しました。

学校には約四十名の子供達が待っていました。この学校
には、日本なら幼稚園児から小学生くらいの年齢の子供達
が通っています。中には親が仕事で家を空けるため、就学
年齢に達していないにも関わらず小学生のお姉さんに手を
引かれて学校に来ている小さな子供もいます。

私たちは子供達の待っている教室に入りました。教室の
中には蛍光灯や電球などは一切なく、非常に暗い中で子供



達は勉強をしていました。窓にはガラスが入っておらず、
寒い冬は大変だろうと思えました。校舎の屋根もブリキ板
を乗せてあるだけの粗末なもので、雨の日には雨漏りがひ
どいようでした。

私たちが教室に入ったとき、小さな子供達は外国人であ
る私たちを見て少し怖がっている様子でした。でも、担任
の先生から私たちのことを聞くとすぐに笑顔になり、私た
ちを迎えてくれました。私たちは簡単な自己紹介をし、子
供達一人一人にノートや鉛筆、消しゴムなどの文房具を手



渡していきました。日本から持参した新品のノートや鉛筆を受け取ると本当にうれしそうにしています。珍しそうに何度も文房具を眺めている子供や、大切そうにすぐにかバンにしまおうとする子供など、日本の子供達には見られない姿でした。

バワニカリカ・
セカンダリースクール訪問
(二〇〇五年八月二十一日)



八月二十日、カトマンズからバスで約八時間の山道を走り、私たちはポカラという町に到着しまし



た。このポカラという町の郊外に第二の訪問地である、バワニカリカ・セカンダリースクールがあります。

八月二十一日、私たちはミニバンを一台レンタルし、バワニカリカ・セカンダリースクールに向かいました。町中から郊外へ、そして舗装されていないガタガタ道を走り、学校に到着しました。学校の敷地内に車が入っていくと、教室の窓からたくさんの子供達が手を振ってくれました。この学校は、ジョティイ・プライマリスクールと違い、子供の数が約七百人と非常に大きな学校です。学校の規模



は大きいのですが、やはり校舎は粗末なもので、教室には電灯や窓ガラスはありませんでした。この学校では小学生になる前の子供から、高校生くらいの子供までと一緒に勉強しています。

私たちはまず、一番小さな子供達が勉強する「ナサリー(Nursery)」クラスの教室に入り、子供達に文房具を手渡していきました。最初、外国人である私たちが差し出す文房具に戸惑っていました。次第にうち解けてきて、私たちが文房具を手渡すと両手を合わせて「ダンニャバード(ありがとう)」と声を掛けてくれるようになりました。その後、順々に年長のクラスの教室を回って一人一人の子供達に文房具を手渡していきました。全ての子供達に文房具を手渡した後は、大きな校庭で子供達と一緒に遊びました。子供達と一緒にサッカーをしたり、日本から持っていた折り紙を教えたり……。小さな子供達とは持参した風船やシャボン玉で遊びました。ここでもゼミ生達は、「子供達の笑顔がとても明るかった」と感じていたようでした。

シュリークンダハ・

プライマリスクール訪問

(二〇〇五年八月二十三日～二十四日)

三つ目の訪問校
となったシュリークンダハ・プライマリスクール

ール。この学校を訪問する目的は、単に子供達に文房具を手渡すだけでなく、学校敷地内にストリート・チルドレンのための施設を建設することでした。

八月二十三日の朝、この日もレンタルしたミニバンに乗り込み、目的地であるシュリークンダハ・プライマリスクールに向かいました。学校前に到着すると校門からまっすぐ一列に子供達が並んで出迎えてくれました。私たちが校門から入ると花で作った首飾りを首に掛けてくれ、子供達が手に花を手渡してくれました。校舎の前に到着する頃には、両手で持ちきれないほどの花で手元が一杯になりました。私たちが校舎の前に到着すると、学校の教職員や生徒、更には地域住民の方々が揃って歓迎セレモニーを開いてくれました。このシュリークンダハ・プライマリスクールはこの地域で一番貧しい家庭の子供達に通っている学校だそうです。このような学校に海外のグループが施設建設のための資金を寄付し、しかも実際に現地を訪問して施設建設を手伝うことに対して地元の人たちは「非常に驚いている」との事でした。そのようなことから、歓迎セレモニーには地域住民の方々もたくさん参加してくれ、地域をあげて歓迎してくれました(この様子は、翌日のネパールの新聞に掲載されました)。歓迎セレモニー終了後、

これまで訪問した学校と同様に、子供達一人一人に文房具を直接手渡しして行きました。

しばらく休憩し、施設建設の作業が始まりました。滞在日程の関係上、私たちは二日間しか作業に参加出来ないため施設の屋根作りだけを手伝うことになりました。当初、施設の側壁はほぼ完成していましたが、屋根は全く手つかずの状態でした。私たちは、施設の屋根の骨組みを作り、コンクリートを流し込む作業を手伝うことになりました。日本のように機械を使えば短時間で完成させることが出来



ると思いますが、ネパールでは全て手作業です。初日はゼミ生全員で屋根に上がり、縦横に並べられた鉄筋を一つ一つ針金で止めていく作業をしました。途中で雨が降ってききましたが、ゼミ生達はびしょびしょになりながらも黙々と作業を続けました。その作業が終わった後は、大きなダンプカーで運ばれてきた大量の砂をシヨベルで降ろす作業をしました。これも非常に厳しい作業でしたが、男子学生が交代しながら十トン以上ある砂を全て降ろし終えました。(一日目終了)

二日目は、朝の七時過ぎから作業が始まりました。昨日準備した砂と砂利、セメントを混ぜ合わせてコンクリートを作り、施設の屋根に敷き詰める作業です。日本ならミキサー車でコンクリートを作って機械で屋根に上げると思いますが、昨日同様、全て手作業です。麻袋に約五十kgの砂や砂利を入れて運び、近くの小川からバケツで水を汲んできてセメントを作りました。できあがったセメントは、大きな鉄製のトレーに乗せて手渡しで屋根に上げていきます。休むことなくひたすら作業を続けました。全員がセメ



ントでドロドロになり、また全身汗だくになりながらも、厳しい作業を続けました。作業自体は非常にハードでしたが、厳しい労働をする中でも現地の人達と声を掛け合い、時には一緒に歌を歌いながら楽しく作業をすることが出来ました。

二日間掛けて施設の屋根を完成させ、私たちは学校を後にしました。学校を離れる時には、二日間一緒に働いた人達や学校の先生達がみんな揃って見送ってくれました。たった二日間しか作業に参加できませんでしたが、泥まみれ



になって現地の人たちと一緒に働けたことで、言葉の壁を越えた交流が出来たと思います。

活動を通して

本年度のネパール教育支援活動も昨年までと同様、現地では一泊四百円程度のホテルに泊まり、度々起こる停電やお湯の出ないシャワーと格闘しながら全日程を終了しました。ネパール到着直後は、日本と全く違う空港や道路の様子、ホテルの設備の不十分さに不満を言い、ネパールを否定的に見ていた学生達ですが、日が経つにつれ、自分たちの不平や不満がいかに自分勝手なものかに気づくようになりました。毎晩、「ミーティング」を開き、その日の出来事を全員で振り返りました。自分自身の体験とその時感じた気持ちをもみなで振り返ることによって、自分たちが何気なく過ごしている日本での日常生活を別の視点から見つめ直すことが出来ました。学生達は貧しいネパールの人々の生活実態を目の当たりにし、恵まれた環境の中で生活できる日本という国の「有り難さ(ありがたさ)」を再認識するようになったようです。また、粗悪な教育環境であるにも関わらず一生懸命に勉強している子供達の姿を見ることによって、自分達が如何に「勉強していないか」を再発見し、自分自身の「甘さ」を実感するようになったようです。そして何よりも、そのよ

うな生活環境や教育環境を自分自身に与えてくれている親の存在に感謝するようになり、ミーティングでは「日本に帰ったら真っ先に両親に『ありがとう』と言いたい」と涙を流しながら話す学生もいました。

学生達の声

ここでは、ゼミナールの学生達の考え方が本活動を通じてどの様に変ったのかを紹介したいと思います。先述のように、ネパールでは毎晩全員で集合してその日に経験したことを振り返り、自身の感じたことをメンバーの前で報告しあう「ミーティング」を行いました。各メンバーは自分自身の思いをみんなの前にさらけ出し、中には涙を流しながらその日に感じたことを話す学生もいました。このような「ミーティング」を通じて、ゼミ生達の中には数々の共通認識が出来上がりました。それらの集大成として、ゼミ生達には帰国後に「自分自身がどの様に变化したのか? (自分自身に対する考え方の変化)」、「ものの見方がどの様に変ったか? (自分の周囲にあるものや周囲の人々に対する考え方の変化)」というテーマでレポートを書いてもらいました。ここでは、学生達のレポートから抜粋した「生の声」を紹介したいと思います。

活動を通じて

「自分自身がどの様に
変化したのか？」

「基本的に色々考え方が変わった。日本では普通の暮らしをしてきたつもりだったが、ネパールに行ってみて日本ではとても贅沢な生活をしているのだと感じた。日本での全てが『当たり前ではない』と思えるようになった。

ネパールの学校には電気も通っていない、窓ガラスも無いし、机もとても小さい。こういった環境でネパールの子供達は必死に勉強をしている。それに対して自分たちには勉強できる良い環境がある。しかし、それほど勉強していない。こういった点は考え直さないといけないと思う。日本にいる間にもっと英語の勉強をしなければ、ネパールでもっとコミュニケーションを取れた。『勉強をしなければ……』と思うのは誰にでも出来る。今までも同じようなことはたくさんあった。思ったことは実行に移さないといけない。自分はこれをネパールで学んだ。

自分は十分な程の暮らしをしているのに、もっと良いもの求めて親や他の人にも色々と甘えている部分やわがままな部分があった。日本に住んでいて『ありがたい』とあまり感じなかったからだと思う。ネパールに行き、日本がどれだけ『ありがたい』かを感じた。これを機に、甘えやわがままは無くしていかなければいけない。今回ネパールに行き、本当に自分のため

になったし、成長できたと思う。」

(K・K・1 [男性])

「ネパールに行く前は、自分が恵まれているなんてあまり感じたことはなかった。でも実際にネパールに行って、どれだけ自分が日本で恵まれた環境で育ってきたかが分かった。

今まで自分はあまり自分から積極的に人に話しかけなかった。どちらかと言うと、聞いてそれに相づちを打つ方が多かった。でも今回の活動を通じてそれじゃ駄目だと思った。向こうの人は初対面で、しかも外国人の僕にどんだん話しかけてきてくれた。それに応えようと、知っている英語を言った。でも相手には通じなかった。自分の英語力の低さに恥ずかしいと思った。」

(K・K・2 [男性])

「実際、ネパールにいたときは目の前に現実がある。でも、日本にいたら目の前は豊かな暮らし。この差を現実にしたとたん私は胸を打たれました。私はあまりにも小さすぎる生き物でした。ネパールの人々はみんな笑顔で明るく、日本の人々は暗くて元気がない。そういう差があると私はふと思いました。

確かにネパールでは色々勉強させてもらったが、一度ネパールに行っただけで『自分は成長した!』などと思いたくない。人生長いか短いかは知らないが、生きている間に少しでもたく

さんの国や人に会いに行きたいと思うようになった。」

(I・T [男性])

「カトマンズ、ポカラで生活し、現地の子供達とふれあい、自分の考えは大きく変わった。英語の未熟さや行動力のなさ、他にも色々自分の考えを変える物事は多くあった。日本は豊かで何をするにも環境が整っている。クーラーのついた学校、移動には電車、きれいな水道水にお風呂に入るときにはお湯の出るシャワーなど、日本では当たり前のようになっているが、ネパールでは違う。学校の黒板はコンクリートに色を塗っただけで、窓ガラスはついていない。長距離の移動は鉄道がないためバスであり、それも整備が行き届いていない山道を何時間も掛けて移動しなければならぬ。日本では普通だったことがネパールではそうじゃない。ネパールではこれが普通なのだ。そう感じたとき自分は今までどんなに楽に生きてきたんだろうと思った。自分はいつも楽な方に逃げる癖があった。面倒くさいことはやらなかった。でも、ネパールで過ごしているとそんな考え方自体がおかしく思えた。逃げて楽な方にばかりしていても自分のためにならない、逃げてばかりでは精一杯生きるなんて言えないと感じるようになった。もっと行動し、損得関係なしに動けるようになって、この豊かさに甘えないように生

きていこうと思った。」

(N・S [男性])

「まず、自分の英語力、積極性のなさをすごく感じる事が出来ました。ネパールに着いた時は人を全く信用できなくて、自分から現地の人に関わろうとはしなかったけど、何でも積極的にコミュニケーションを取ることで相手の事も分かるし、自分自身にも余裕ができることに気づき、自分から話しかけなければ前に進めないと感じました。でもそれに気づいたのは、もうネパールの旅も終わりがけのところ、結局悔いが残ったままの帰国になってしまいました。その中で私が強く思ったことは、『英語がもっと出来たら……』でした。ネパール滞在中に何回も何回も思いました。積極的に話しかけたいけど日本語は全然通じないし、かといって勉強してきたわけでもなかったの、ネパール語は全く出来ない。ネパールに行く前は、『英語やったら何とか出来るだろう』と考えていたけど、実際は発音も少し違うし、大学に入ってから積極的に英語の勉強をしていなかったもので、簡単な英語も理解することが出来なかった。大学生として行っているのに、自分よりはるか年下の子供達の話す英語が理解できないなんて、日本の大学生としてもすごく恥ずかしいし、情けないことだと感じました。だから、英語を勉強することと、積極的になることがネパール帰国後の新たな

自分自身の課題であると感じました。」 (S・R 「女性」)

「ネパールに行つて感じたことはたくさんあります。私は今までの自分の生き方に対して何か行動する前に無理と決め付けてしまつていたような気がします。就職に関してもただ焦つているばかりで、ちゃんとした自分の道を見つけられていないと思ひました。でもこのネパールに来てここで出会つた人たちが、ここで貰つたたくさんのお気持ちや思い、それにカンパしてくださつた方に対する感謝のお気持ちなどが今までにない『ありがとう』という気持ちでいっぱいになり、これまでの人の見方、考え方が前より変わつてゐるということは自分でもよく分かりました。

テレビなどで、目の見えない子供や、貧しい暮らしをしてゐる人を見たことはありましたが、実際にその地へ行くことによつてその苦しい現実を感じ、そこで何をすべきか、どうすればいいのか分からなく、泣くことしか出来なかつたけれど、これから先、何らかの形で自分も支援していきたいと強く感じました。先生がミーティングの時に話してゐた『日本再発見』や『自分再発見』などのテーマは日本を離れてこそ発見できるものだと思います。特に『日本再発見』に関しては、どれだけ自分が恵まれた国に生まれたのかということがネパールに来てよく分

かった。そしてマザーテレサの『与えてください。あなたの心が痛むほどに』という言葉はなんと表現したら良いのか分からないけれど、私の心に一番残つた言葉でした。」 (K・N 「女性」)

「ネパールに行くまでは本当にわがままで自分勝手な人間でした。自分の言い分が通らないと親に怒つたりすねたり大人気ないことを本当には知らされていません。でもネパールではわがままが通らないことを本当には知らされました。ネパールの水は鉄臭くてお風呂もその水で入らなくてはならなくて、その事で早速『こんなお風呂入れない』と愚痴を言つてしまいました。なかなかお風呂に入らなくて、今日くらい入らなくても大丈夫つて自分に言い聞かせていました。でも友達に『今この水に慣れておかないといつになつても慣れることは出来ないよ』と言われたときに自分は何をわがままを言つてゐるのだと思ひました。一回入つてみるとだんだん慣れていきました。日本が恵まれてゐるだけであつてネパールではそれが当たり前で、自分がどれだけ贅沢な生活をしてきたのがようやく分かりました。そう思ふことでネパールの生活を楽しむことが出来ました。ネパールに行ったことで自分がどれだけわがままだったか発見することが出来ましたし、治すチャンスをももらえたと思つてゐます。そして、今まで学校に通つてゐることも当たり前だと思つていたので

ネパールの教育事情を見たことによって大学まで通わせてもらっている『ありがたさ』を感じる事が出来ました。日本では当たり前前の事だけど、ネパールを見たことでその当たり前前に一つ一つ感謝する気持ちを感じる事が出来るようになりました。」

(N・S 「女性」)

「思ったら行動を起こすこと。今までは、やろうと思っても行動につなげることが出来なかった。ネパールに行って、少しずつ変わろうとしている自分がいると思う。日本に帰ってきてすぐ弟が入団しているボイスカウトの人から『ボイスカウトのリーダーやってみないか』と誘いがあった。まったくの突如の出来事だったが、前から少し興味があつた。以前の私なら、興味があつたとしても出来ないという気持ちになり、勇気が無く断っていたと思う。でも、これでは前と一緒にダメだと思つた。『やろうと思つたなら行動しないと……』という感情が心のどこかで芽生えていた。

全く興味がわかないことだつて、やってみたら興味を持つかも知れない！また、今まで経験できなかったことが出来るかも知れない。人があまり経験できないようなことがしたいと思うようになった。ネパールに行つて自分を再発見できたように、何かはじめてのことに挑戦するとまた新たな自分が発見できる

と思う。もっともっと新たな自分発見をしていきたいと思うのでこれから色々な事にチャレンジしていきたいと思う。」

(K・M 「女性」)

「ネパールの学校を訪問しているうちに考えさせられたのは、『自分は大学生としてもっと自覚を持たないといけない』ということ。ネパールでは大学に行くことは簡単な事ではなく、もちろん頭が良くなければならぬし、多くのお金もかかりませぬ。そのことは日本でも同じですが、ネパールと比べて比較的簡単に入学出来ると思ひます。ネパールには文房具さえ満足に買えない子供も居ますし、学校も満足のいくものが建てられていないと言へませぬ。大学まで行かせてもらつていて自分が満足に英語も話せないことがとても恥ずかしく、また悔しく感じられました。ネパールの子供達は私たちを見て、『大学生なのだからすごい人達だ』と思つていたかも知れませぬ。でも、実際に話をしてみて、がっかりしたかも知れませぬ。そう思うと、情けなくなりました。大学では本当に自分で動かないと得られるものが限られてしまひます。流される学生生活ではなく、大学生としてもっと充実した日々を送るべきだと考えさせられました。」

(O・E 「女性」)

活動を通じて

「もの見方が

どの様変わったか？」

「今までは日本での生活が当たり前で、日本が豊かな国であることなど考えたことがなかった。しかし、ネパールと日本と

では何もかも違い、日本がどれだけ豊かな国であり自分がどれだけ幸せな生活をしているのかを考えさせられた。ネパールで『生きていくのがやっと』という感じの人を見たのもあり、日本で生活できていることだけでも幸せで、ありがたいと感じた。自分たちはたくさんの人に感謝しなければならぬと思う。

日本では、二十四時間物を買えるコンビニがあったり、いつでもお湯が出たり、道路が舗装されているし、多くの家庭に車がある。ネパールでは本当に考えられないことだ。しかし、これら日本人が必要としているものは、ネパール人にとってみたら別に無くても何の不自由もない。今の日本は無くてもいいものを必要とし、それらがどんどんと実現されている。とても贅沢していると思う。これで本当に良い日本になっていくのかな、と自分は考えるようになった。

自分は今の日本に必要なものは時間だと思う。ネパールでは短期間の中で色々な体験ができたし色々な場所を見ることも出来た。本当に充実した日々を過ごすことができたし、日本では

体験できないこともたくさんできた。日本は時間に追われていると思うのもう少し時間の使い方を考える必要があると思う。」

(K・K・1「男性」)

「蛇口をひねればいつでもお湯が出る。暇なときは音楽を聴いたりテレビを見たり、ゲームをする。お腹がすいたら冷蔵庫を開ければ何かある。そういつたことが当たり前と思っていた。帰る家があり、両親もいる。でもネパールでは、その当たり前がない。まだ小さい子供が家もなく、両親もなく、働いている。そんな子供がたくさんいる。日本ではあり得ない。でもそれがネパールでは当たり前のように感じた。かわいそうだ、そう感じたら駄目だけど、そう感じるしかできなかった。

自分は今、コンビニでバイトをしているけど、賞味期限の近づいた食べ物全て捨てている。前から勿体ないと思っていたけど、ネパールから帰って来てからはもつと強く感じるようになった。自分もちよつと破れた服を捨てたり、『もうお腹がいっぱい』といってご飯を残したりしていた。物のありがたさというのを全然分かっていなかった。でも今回の活動で、物のありがたさや日本の豊かさが分かって良かったと思う。鉛筆一本にしても、とても価値のある物なので、そういうことを再認識して生活していきたいと思う。でも今回で活動は終わりじゃない

くて始まりだと思う。まだ自分はネパールのことを分かっている。今回見たのがネパールの全てじゃなく、氷山の一角に過ぎない。しかも、自分の力じゃなく、他人の力を借りて行ったに過ぎない。全然、NPO活動とは言えないので、いつかは自分の力だけで行きたいと思う。全ての物に感謝。」

(K・K・2 [男性])

「私は、良い言葉を並べるばかりで考えようともしない、動こうともしない、人のために何もしない……。私はこんな人間だと思う。」

ただ、弱冠二十歳の私に今できることと言えば、自分の弱さを知ることだと思います。今は自分の弱さを知った上で、自分とはどういう人間なのかを探さなければならぬと思う。自分の弱さを知って少しでも大きくなれたら良いなあと思います。」

(I・T [男性])

「ネパールを訪問して自分の考えだけでなく、もの見方も変わった。日本に帰ってきていろんなものに感謝するようになった。移動用の乗り物、整備された道路、美味しい食べ物、きれいな水などたくさんある。ネパールでは日本のように生活環境が良くないし、過ごすには多少なりともネパールの環境に慣

れる必要があった。でも、この環境の中で暮らすことによつて普段は気づかない事や日本のありがたさがよく分かったと思う。日本で暮らしていたらそれが当たり前のことのようになってしまい、日本がどれだけ生活環境に恵まれているかなんて感じないと思う。どこの国も自分の国が当たり前だと思つていても知れない。けど、違う国に行つてみれば全く違う環境で過ごしているし、風習や食べ物も違う。だから自分の国だけに留まらず、いろんな国に行つていろんな体験をすることが大事だと思う。」

(N・S [男性])

「ネパールに着いた当初、何に対しても『日本やったら○○なのに……』という言葉が自分の心の中に必ず出てきました。絶対日本中心で見えてしまうところがあって、そういつたらさりがなく、文句や不満ばかり感じていた気がします。また、かわいそうだと感じたり、すごいと感じることがたくさんあったけど、それは全部ネパールでは当たり前のことであつて、比べるだけではなく、『ネパールという国』を見る必要があると気づいた。そう考えれば考えるほど、日本という国は豊かで自分はずごく恵まれた世界で今まで生きてきたということを改めて感じるようになった。……(中略)……」

帰国して両親がいること、他国に比べて治安が安定している

こと、交通機関が発達していること、恵まれた環境など、ネパールを訪れるまで感じなかった事に対して、いろいろ感謝することがありました。日本に対する見方が少し変わったことは、自分が成長した証拠だと思います。」

(S・R 「女性」)

「日本に帰るときには『自分はちゃんとここに来て勉強できたのだろうか?』とか、『自分は何かできたのだろうか?』など考えていました。それだけネパールという国や現地で出会った人たちから貰ったものがたくさんありすぎたからだと思います。関西空港についてゼミメンバー以外の人の日本語を聞いたときは、正直ホッとしました。でも、帰ってきてからさらに『日本再発見』が出来たように思います。最初はネパールに行くことが不安で行かないつもりでした。でも、友達に誘われたことと、先生の『実際に行ってみないと分からないし、言葉では伝わらない』と言われたことでネパールへ行くことを決めました。今では本当に行つて良かったと思つています。一日目からハプニングで疲れたりもしたけれど、ネパールに行つて感じた皆さんの想いは、ネパールの人々だけでなく一緒に行ったゼミのみんなのおかげでもあると思う。藤原ゼミに入つて本当に良かったと思ひました。」

(K・N 「女性」)

「ネパールに行くまでは、『ありがたさ』を当たり前のよう
に思つていたし、日本での生活もこれが当たり前だと思つて
ました。ネパールでは学校に通う事が出来ない子供もいたし、
通うことが出来たとしても文房具をかうお金がなく鉛筆も本
当に短くなるまで使つていた。その光景を見ていたら、ちよつと
短くなったからと言つて捨てていた自分が馬鹿らしく思えま
した。ご飯でもお腹が一杯になつたからといつてすぐに残してい
たし、食べられることを当たり前に思つていたけれど、ネパール
ではお腹一杯に食べられる家庭も少ないし、食べ物を買うお金
さえない人もいた。そのような姿を見ていたら心が張り裂けそ
うになつたけれど、でもお金をあげることには出来なくて、ただ無
視することしか出来ませんでした。日本で好き嫌いをすること
がどれだけ贅沢なことか分かりました。学校に行かせてもらつ
ているのも当たり前だと思つていたし、ペンやノートを使うこ
とも当たり前だと思つていたけれど、その一つ一つを出来ること
に感謝しながら生活していきたいと思ひます。そして、親には
ご飯を食べさせてもらつているありがたさ、学校に行かせても
らつてのありがたさを常に持つておきたいと思ひます。ネパ
ールに行けた事でそう思えるようになったので、本当にネパ
ールに行けて良かったです。行くチャンスをくれた先生にも感謝
します。」

(N・S 「女性」)



ネパールから帰国した藤原ゼミのメンバー(一番右端が筆者)

「日本にいたら感じるものが出来ないことばかりだった。日本では当たり前に行っていたことでも、ネパールでは当たり前ではなかった。当然だが行くまで感じるものが出来なかった。日本では『あって当たり前』のものがネパールには無かった。：

…(中略)…

文房具を渡
しに行ったが、
日本では鉛筆
やノートなど
あって当たり
前に生活して
いた。まだ書
ける鉛筆やノ
ートなど無駄
が多すぎると
思う。大切に
していればま
だまだ使える
ものってたく
さんあると思

う。子供達に文房具を渡していて、どの子供もうれしそうに受け取ってくれているのが印象的だった。日本では、あの笑顔は見られないと思う。そして、何をするにしても『もったいなかなあ?』と思うようになった。お湯のありがたさが一番分かった。夜にお風呂に入ったり、晴れていない日のシャワーの水はすごく冷たく寒かった。日本では蛇口をひねると温かいお湯が出てくる。ほんとありがたいことだと思う。…：日本に帰ってきて、今日本で生活していることに感謝しないとけないと思った。一人でも多くの人にありがたさを分かってもらいたいと思う。」

(K・M 「女性」)

「活動を通じて大きく見方が変わったのは、やはり『日本という国』のことです。ネパールでの生活と比べると、日本の豊かさや便利さがよく分かりました。今まで『当たり前』と思っていたことに対しても『ありがたさ』を感じるようになりました。…(略)…

帰国後は、家族への見方も変わりました。今までは、大学に行かせてもらっていることを当たり前のように感じていました。しかし、ネパールでは大学に行くことは大変難しいことで、ノートや鉛筆さえ買えない子供達にとっては、到底行けるよう

などところではありません。日本であつても親が働いてくれているからこそ、大学に行っていることを忘れてはいけないと思ひました。日本に帰つてからは、今まで以上に身の回りの手伝いをするようになり、感謝の気持ちを忘れないようにしています。」

(O・E)「女性」

「日本に帰つてきて普段の生活が始まつた。毎日、アルバイトに行つて、日本人とネパール人の生活を比べてみると、日本人は本当に毎日贅沢な生活を送っているにもっと気がついた。きれいな道路を走つて、温かいお風呂に入つて、これを見んなは当たり前と思つている事だ。……日本に戻つてきて視野も変わつて、今までの生活がもつた意図をもつと感じるようになった。こういう色々な経験をしてみて、本当にありがたさを言葉で言うだけでなく、実際に行動してきたいと思つている。」

(H・E)「女性・留学生」

おわりに

京都経済短期大学の藤原ゼミナールでは「実践を通じて学ぶ」ことを重視しています。ゼミ生達には「(頭で)考えること」だけでなく「(身体を使って)行動すること」、そして「(心で)感じること」の大切さを伝えていきます。彼・

彼女たちには、頭で考え、自ら行動し、心で感じ取ることでできる人間になつて欲しいと思つています。このような人間こそ、本当の意味において社会で求められる人間であり、「自立した個人」であると思ひます。

上記「学生の声」に見られるように、学生達はネパールの子供達に文房具を与えることによつて、それ以上のものを子供達から与えられました。「与えることによつて、与えられる」。この言葉は、学生達がネパールでの「ミーティング」で得た共通認識であります。シンプルな言葉ではありませんが、非常に重みのある言葉だと思ひます。そして何より、この言葉の本当の意味は、実体験を通じてのみ理解できるものだと思います。

以上、二〇〇五年度の「ネパール教育支援活動」について簡単に紹介させて頂きました。京都経済短期大学藤原ゼミナールでは「ネパールの子供達によりよい教育環境を！」をテーマに、次年度以降も「文房具の手渡し」と「学校の校舎建設」を継続していく予定であります。応援、よろしくお願い致します！